

## 巻頭言

### 交流から連携へ

宮崎大学情報基盤センター長

廿日出 勇

大学の情報基盤をいかにすべきか、自由にいろいろなアイデアを出して議論するのは楽しいものです。しかし、実際にシステムを導入する際には、予算、利用可能な技術や製品、運用管理に必要な技術や労力など様々な制約があり、制約下で大学にとって最良と思えるシステムを構築しなければなりません。また、多くの大学では、主要なシステムを4～5年のリースで導入しているので、リース中に陳腐にならない先進性も求められます。進歩の速いICT分野で4～5年先を見通すことになるのですから、情報系センターの関係者は、リースの更新のたびに苦勞されていることと思います。

「大学の情報基盤をいかにすべきか」、この問題を難しくしている原因の一つは、コンピューティング環境が大きく変化する時期にきているからです。利用者をスムーズに新しいコンピューティング環境に移行させていくことは、大変なことですが、センターの重要な使命です。現在進行しているクラウドコンピューティングへの流れは、かつてのコンピュータのダウンサイジングやインターネットへの接続に匹敵する大きな変化であり、どのような形態のクラウドにするのか、どのサービスを外部に出すのか、難しい判断をしなければなりません。

もう一つの原因は、情報系センターを取り巻く環境の変化です。法人化以降、センターの関わる業務は広がり、図書館や事務の情報部門との連携も進んでいます。センターの業務が増える一方で、経営効率化のために業務・システム最適化が推進され、予算や人員の削減が進められています。さらに、東日本大震災を契機に、大学の情報システムのBCP対策が真剣に検討され始めました。予算などの制約が厳しくなるなか、情報基盤に求められる要求は高くなってきています。

このような厳しい状況では、知恵を出し合うだけでなく、複数のセンターが連携して共通の問題の解決にあたる必要があるのではないでしょうか。例えば、大規模災害に対応するには、遠隔地にバックアップシステムが必要ですが、同じ立場の大学ということで、重要データの相互バックアップやシステムの運用代行を行いやすいのではないでしょうか。BCP対策をきっかけに、センター間の技術と人の交流が進み、大学間クラウドやシステムの共同開発など、連携の輪が広がっていくことを期待します。

学術情報処理研究集会は、国立大学法人情報系センター関係者の研究発表と情報交換の場です。本誌「学術情報処理研究」に掲載された情報基盤の構築と運用に関する先進的な取り組みが他センターの参考になり、集会での交流が新しい連携につながれば幸いです。